

ヨーロッパの博物館を視察して

江平憲治*

Report of the Inspection of European Museums

Kenji EHIRA

はじめに

平成7年度文部省社会教育主事等海外派遣（学芸員特別コース）として、平成7年10月13日～26日の2週間にイギリス、ドイツ、イタリア、フランスの4か国にある国立博物館7館を見学する機会を与えていただいた。全国各地の学芸員等8名、文部省1名、添乗員1名の総勢10名の視察で、予定の日程を無事終えることができた。ここでは、研修視察の報告としてヨーロッパの博物館の現状を紹介するとともに、日本の博物館と比較しながらその特徴を述べてみたい。なお、紙面の都合上全部の博物館を紹介できないが、特徴的な違いのある3つの博物館を中心に述べることにする。

最後にこのような研修の機会を与えていただいた文部省をはじめ各関係機関に対して深くお礼申しあげる。

1 日程及び見学した博物館名

平成7年（1995年）10月

13日（金） 成田よりモスクワ経由パリへ

14日（土） パリよりロンドン着

15日（日） 自主見学（大英博物館）

16日（月） **大英自然史博物館視察**

17日（火） **ロンドン科学博物館、**

大英博物館視察

18日（水） ロンドンよりミュンヘン着

19日（木） **ドイツ博物館視察**

20日（金） ミュンヘンよりミラノ着

レオナルドダヴィンチ科学博物館視察

21日（土） 市内見学

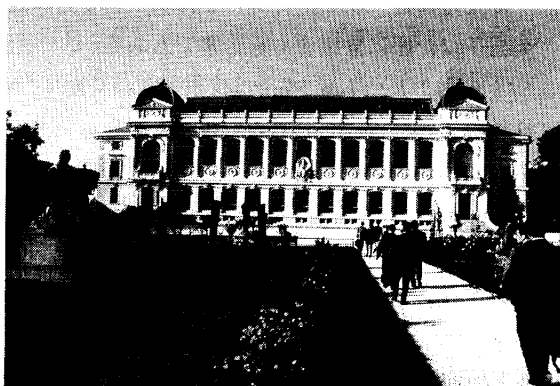
22日（日） ミラノよりパリ着

23日（月） **フランス国立自然史博物館視察**

24日（火） **ラビレット科学産業都市視察**

25日（水） パリより成田へ向け出発

26日（木） 成田着

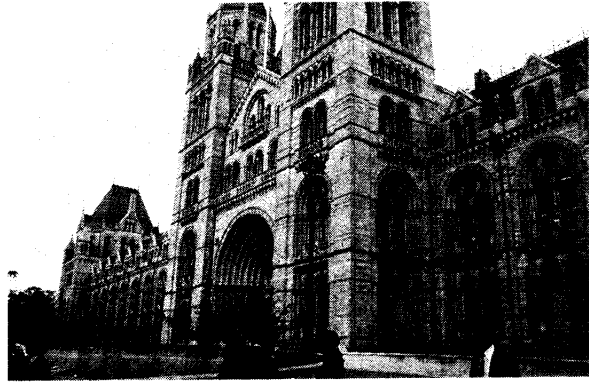


フランス国立自然史博物館（植物園内にあり分野ごとに建物が分かれている。正面は動物学の建物）

2 視察した博物館の概要

(1) 大英自然史博物館 (ロンドン)

世界で最も古い大英博物館 (1759年設立) の資料増加に伴い、自然科学系資料を移動して、1881年に設立。領域は動物学、昆虫学、植物学、古生物学、鉱物学の5分野で約6,500万点の標本類を所蔵している。



大英自然史博物館

A 組織、運営について

館長の上に評議委員会があり、12人の委員で構成されている。この12人のうち、8人は首相により任命され、1人はロイヤルソサエティー (学会) より学会のメンバーを任命する。あとの3人は、先の9人が任命する。この委員は科学者、大学教授、会社の会長、かつての国連大使などで、年4回の会合がもたれ、最終の決定権をもっている。

館長より下の組織は次のとおりである。

- ①科学部門……動物学、昆虫学、植物学、古生物学、鉱物学、図書館の領域に分けられる。
- ②展示・教育部門……教育担当の職員は、引率されてくる子供たちのために、前もって博物館で何ができるかを教師と打ち合わせたり、ワークシートの利用などの指導の援助を行う。
- ③入館者サービス部門……一般客の保安、ガイド、清掃、食堂、売店等の業務を行う。
- ④開発・営業部門……開発、宣伝、営業等の業務を行う。スポンサーを求めて支金を集めたりもする。
- ⑤実務サービス部門……館運営の財務、人事、ビジターの衛生管理等の業務を行う。

館の職員は総数750名で、そのうち半数が科学者である。

5年毎にローリングプランを作成し、さらに詳細な1年毎のプランを作成する。これらのプランの冊子は、国に提出する報告書でもある。

1年間ごとにJob Plan (仕事内容の計画で、例えばチョウのデータ入力を何点入れるとか、売店の売上げ目標額をいくりにするとかいったもの) を示し、それによって職員を雇う。仕事の出来具合については上司が評価し、給料に影響する。

B 事業について

(a) 教育普及活動について

年間入館者は約170万人で、そのうち約20万人が学校から引率されてくる子供たちである。学校教育のカリキュラムの中に、博物館での学習が組み込まれており、子供たちはワークシートなどを利用して学習し、博物館の教育スタッフ10人がそれに応じている。ディスカバリーセンターは、学童専用の施設でパートの職員8人がその手助けを行っている。成人向けには、知識を広げる目的の成人教育センターがあり、地元や海外での研修 (研究者と一っしょに南米に行くなど) を含む特別プログラムが用意されている。

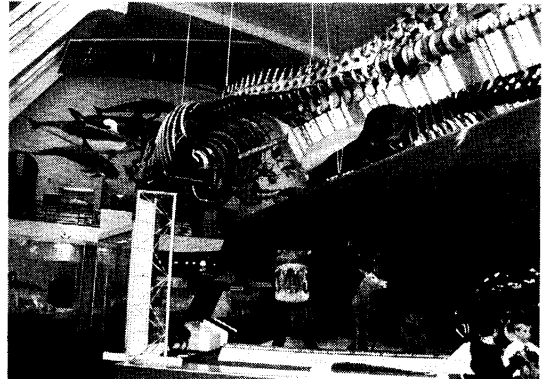
(b) 展示について

22,000㎡の展示場を25人で管理している。見るだけでなく、参加できる展示であることを長所としている。展示更新については、15年もつことを基準としているが、メンテナンスが高い、科学の進歩により展示が合わない、予定した効果をもたないなどの理由により、それ以前に作りかえることもある。3つのセクションとセントラルチームがあり、1つのセクションには、マネージャー、副マネージャー、グラフィックデザイナー、エンジニア、大工、ペインター、模型を作る人などで構成されている。

最も古い展示は、鉱石の展示で1800年代後半のもので、最も新しいのは、恐竜の動く展示（日本製）のものである。



広い通路に展示された恐竜の化石



哺乳類の展示コーナー

C その他

(a) 学芸員制度について

キーパー（1名）、副キーパー（1～2名）のほか、キュレーター（学芸員）、リサーチャー（研究員）に分けられる。以前は多くの日本の博物館のように、学芸員と研究員を分けていなかったが、1990～1991年に分けた。いずれも大学を卒業した科学者である。学芸員の博物館職員としての必要な技術は、採用後博物館の中で養成され、そのためのプログラムも用意されている。研究員は大学院卒業者で、主に専門分野の調査研究を行う。

(2) ドイツ博物館（ミュンヘン）

1903年に設立され、自然科学、手工業、エネルギーと交通、航空等の領域で、約60,000点を収蔵し、その内20,000点を展示している。

A 組織、運営について

運営者は管財人（7名）で、銀行、会社、大学の人がメンバーとなり、年2回の会合を行い、館長の任命権を持つ。その下に館長、さらに次の5つのパートに分かれる。

- ①展示部150名（うち30名が学芸員）、②図書部60名、③作業場・工作部150名、④事務30名、⑤研究所10名

収入総額は約5,000万DM（ドイツマルク）で、その内の約3,000万DMは、ドイツ政府とバイエルン州からの収入で、残りは入場料、食料、売店の益金や産業界または個人からの寄付となっている。寄付については寄付金よりも、ハードウェアの提供が多く、宣伝を兼ねているが、博物館としては中立の立場で展示している。支出については、総額の60%は人件費で、残りは資料や図書の購入費、展示費用、メンテナンスの費用などに活用されている。年間入館者は、およそ130万人で年間355日開館している。

B 事業について

(a) 展示について

自然科学と技術に関する展示で、展示テーマは400ほどある。展示企画は学芸員を中心として10~15人のチームをつくり、チームの中には企業の人や大学の研究者が含まれる。展示物はさわられること、自分で体験（実験）ができることを重視している。展示物の評価の基準は、技術発展の段階のくぎりを示すものにおいて展示している。見学者の4分の1は外国人であるため、パネルなどの解説はドイツ語、英語の両方つけてある。

(b) 研修制度について

学校の教師を対象とした講習会（宿泊研修）を1年間に30コース設け、1回30人で実施している。費用負担は参加者だが、希望者は多い。また、中高生については、推薦された才能のある子供を受け入れて学習させており、年間400人が参加している。

(3) ラ・ビレット科学産業都市（パリ）

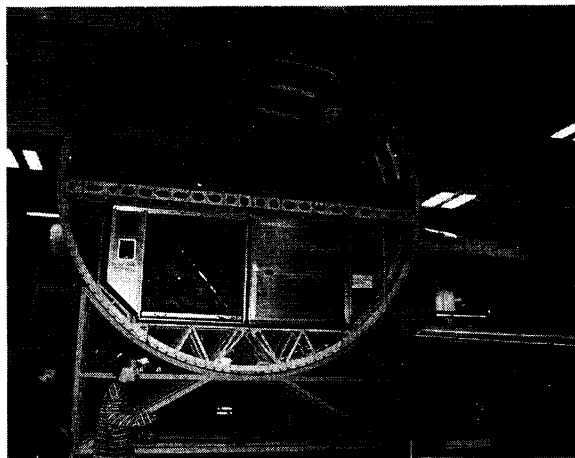
ラ・ビレット公園内にある「科学産業都市」は、1986年に設立された世界最大級の規模を誇る科学技術の普及施設である。

A 組織、運営について

評議委員会のもとに、青少年教育局、展示製作局、国際開発局など8つの局があり、その下の部に、課、係が置かれている。職員数は、約1,500人で学芸員はおらず、教育省から教員45人を内地



ドイツ博物館（イザール川の中洲にあるため土地が狭く、他にも支所がある）



航空機の内部の断面を示す展示

留学（1～2年）させている。予算額は、約145億円（9割が国家予算で、1割が収益金）で、支出の4割がメンテナンス、2割が人件費である。年間入館者数は、約540万人。

B 事業について

(a) 展示について

30,000㎡の常設展示場があり、対話型コンピュータや模型などを活用してテーマ別に探検や体験ができる。1階が子供用の施設で、2階が成人向けの展示となっている。2階はプロデューサーにより展示レベルが異なり、医学に関するコーナーなどでは大人でも難しいレベルの高い内容となっている。

展示更新は毎年行い、床は自由にパネルが作れるように工夫されている。特別展の準備には最低3～4年かけている。また、国外でも、公民館や展示バスなどによる移動展示や講義などを実施しており、日本でも1995年に名古屋、仙台で実施し、1996年に福岡、山口で実施する予定である。東南アジアの未開国でも無料で展示を実施する計画である。

(b) 教育普及活動について

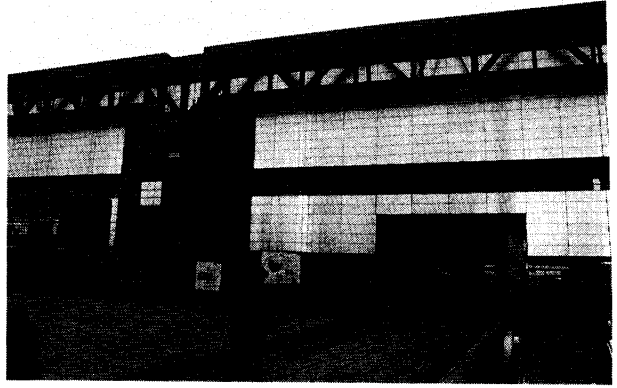
1階に親と子供が一緒に学べる教育施設（学校からの場合は、10人の子供につき教師1人つく）があり、年間50万人が活用している。5～12才、12～18才用に分かれており、触らせる展示などが200点ほどある。90分ごとに400人まで収容でき、90分の内訳はメニューをさがす時間が15分、学習時間が60分、なごりの時間が15分でワークシートにそって学習する。また、90分と90分の間には10分のメンテナンスの時間がある。

3 ヨーロッパの博物館の特徴

(1) 組織、運営について

① 機能的・専門的に細分化された職務分担

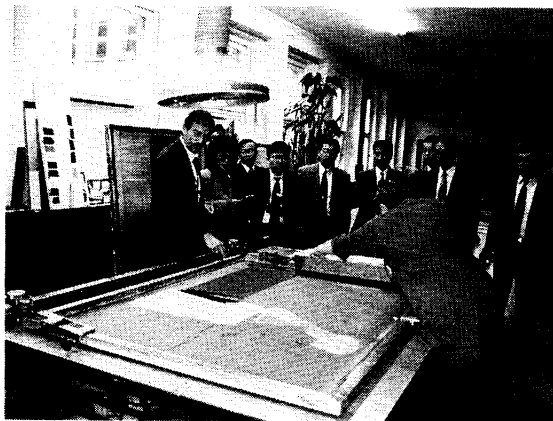
博物館の規模が大きいこともあって、職員数も「ラ・ビレット科学産業都市」が1,500人、「大英博物館」が1,100人、「大英自然史博物館」が750人程度と多い。職員の職務も細分化され、中でも保存管理（Conservation）の仕事をする職員が大きな割合を占め、特殊な技術を要するような細かい作業を行っている。日本では、職員数が少ないこともあって、調査研究から、収集保存、教育普及活動まで1人の学芸員がこなしているところが多い。ましてや保存管理の仕事に相当する展示資料の製作やメンテナンスなどは外部の業者に委託しているのがほとんどである。日本の学芸員は多くの領域の仕事をしなければならないが、個人の能力や仕事の効率などを考えるとヨーロッパの博物館のような職務分担が理想的であろう。



ラ・ビレット科学産業都市
(公園内にある科学技術の普及施設である)



学芸員の指示に従い、保存管理の仕事をする職員（大英博物館）



展示パネルを印刷して作成する職員（ドイツ博物館）

② 民間からの寄付

収入は政府の補助金や、入場料、物品販売等の収益金のほか、民間からの寄付に大きく期待しているところも日本と違う特徴である。とくに産業技術関係の博物館では、寄付金よりも展示品としての商品や機器類などのハードウェアの提供が多い。

③ 中・長期的計画で運営

日本では単年度予算にしばられ、事業を1年で考えることが多いのに比べ、ヨーロッパでは少なくとも3～5年位先のプランにあわせて事業を実施している。このように満足のいく事業を展開していくためには十分な資料収集などの準備期間が必要である。パリのラ・ビレット科学産業都市では1999年の特別展を現在企画中で、担当者2人で2年間に300人ほどの人々に会って情報を集める予定という話であった。

(2) 事業について

① 学校の教育施設としての博物館

学校からの団体の入館者が多く、館内で多くの子供たちが学習している光景がみられた。日本の学校では、遠足とか修学旅行で短時間で見学することはあっても目的意識を持ってじっくり学習するために博物館に来ることは少ないようである。ヨーロッパでは学校教育のカリキュラムの中に博物館での学習が組み込まれており、博物館のほうでもそのための施設をつくったり担当の博物館職員がいて、充分対応ができるようにしている。

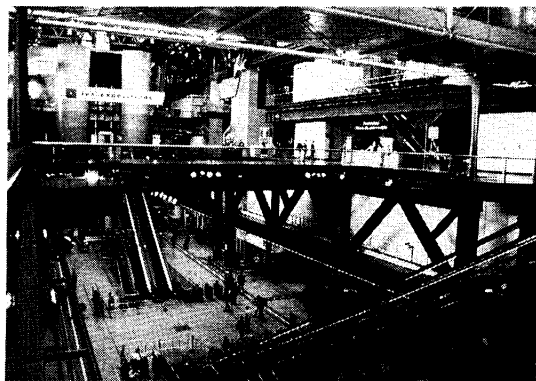
② 児童・生徒、教師の研修制度

ドイツ博物館では、国内の中高生の中から推薦された優秀な子供を受け入れて研修させたり、学校現場の教師が研修できる施設や制度が整っている。学生時代に研修を受け、そのことがきっかけで現在の職業（エンジニアなど）を選んだ人もいたという話であった。

③ 親と子供と一緒に学べる専用施設の充実

とくにラ・ビレット科学産業都市では、1階のフロア全体がそのような専用施設になっており、

ロンドン科学博物館でも子供専用の施設があり、多くの子供たちが参加していた。平日は学校からの団体で、休日は親子での利用者が多い。いずれも体験を通して得られるさまざまな発見や感動の中から、自然科学に対する興味関心を育てる工夫がなされているようであった。日本でも「こども科学館」と称する理工系の博物館がいくつかみられ、参加体験型の展示物や実習のできる施設が作られているが、このような子供たちが充分活用できる施設はまだ少ないようである。



1階が子供専用施設で2階が一般を対象とする展示施設。1階と2階の間はメンテナンス車の通路。(ラ・ビレット科学産業都市)



1階の子供専用施設で活動する子供たち
(ラ・ビレット科学産業都市)

④ 収蔵設備の充実

海外の博物館をみて驚くのは、まず収蔵資料の多さである。自然史系博物館では、フランス国立自然史博物館が15億1800万点、大英自然史博物館が6500万点、日本の国立科学博物館が約140万点で、当館ではわずか約8万点にすぎない。収蔵するにはスペースが十分ないと収蔵できないが、当館に限らず日本の博物館の多くはスペース不足であり、またヨーロッパに比べ高温多湿で資料の保管には不向きで、しかも空調設備が必要となれば維持経費も大きいなどの問題点もある。しかし、少なくとも国内の資料は国内で収蔵できるほどのスペースと設備をもつ博物館が日本にもほしいものである。